『西南アジア研究』No. 34, 1991

『バーブル・ナーマ』と『ターリーヒ・ラシーディー』
——その相互関係——

間 野 英 二

16世紀の前半,互いに従兄弟の関係にある中央アジア出身の2人の人物,すなわちザヒールッ・ディーン・ムハンマド・バーブルとムハンマド・ハイダル・ドゥグラートによって14-16世紀の中央アジアに関する2つの優れた歴史書が著された。チャガタイ・トルコ語によるバーブルの『バーブル・ナーマ』[1]とペルシア語によるハイダルの『ターリーヒ・ラシーディー』[2]である。周知のごとくこの2つの著作は,中央アジア史上他に類例を見ぬ卓越した歴史書であり,そのためこの2書については,19世紀後半以来ヨーロッパ・インドの研究者を中心にかなりの数の研究が積み重ねられてきた。しかし,2書共になお信頼できる校訂テキストが出版されていないという事実が物語っているように,この2書に関連して私たちに残された課題もなお多い。

古来,中央アジアは優れた歴史書を欠く世界であった。それにもかかわらず,16世紀の前半,なぜあのような優れた史書が,2種類もほぼ同時に生み出され得たのか[3]。この単純ながら重要な疑問の解決も,私たちに残された課題の1つであり,本稿もその解答を探る1つの試みである。

この課題に答えるためには,(1)この2人の著者をとりまいた16世紀前半を中心とする中央アジアの文化的状況,特に当時の中央アジアの人々の歴史に対する関心の度合の究明,すなわち,この2つの史書の成立の前提となった一般的文化状況の究明,(2)この2人の著者どうしの関係と両者の直接的な交流の跡の解明,すなわち,2人の著者の相互影響の可能性の有無の解明,(3)この2つの史書の構成,内容,叙述様式等に見られる類似点と相違点の検討,すなわち,両書の内的な相互関係の比較・検討がまず必要とされるであろう。

この内,(2)については筆者は先に「バーブル・バーディシャーフとハイダル・ミールザー——その相互関係——」(『東洋史研究』46-3,1987年)を発表し,バーブルとハイダルの間にきわめて密接な交流関係が存在した事,そしてハイダルがバーブルに対して絶大

な敬意を抱いていた事を述べ,ハイダルの『ターリーヒ・ラシーディー』がバーブルの『バーブル・ナーマ』を範として成ったものではないかとする推論を提示した。本稿はこの推論の根拠をさらに強化するため,先の論考では取り上げなかった(3)の問題を扱い,『バーブル・ナーマ』と『ターリーヒ・ラシーディー』の類似点と相違点を具体的に提示して,両者の直接的な関係をより明確化しようとするものである。残る(1)についてはここでは扱わず,その検討を他日に期したい。

I

まず,『バーブル・ナーマ』と『ターリーヒ・ラシーディー』の比較の結果を簡単な表で示し,ついでその内で問題とすべき諸点について検討したい。

	『バーブル・ナーマ』	『ターリーヒ・ラシーディー』
著者	バーブル(1483-1530) ティムール朝の王子 ハイダルの従兄弟	ハイダル(1499/1500-1551) モグールの貴族 バーブルの従兄弟
使用言語	チャガタイ・トルコ語	ペルシア語
完成年代	1529年頃	1546/47年
完成地	インド	カシュミール
構成	第1部　フェルガーナ 第2部　カーブル 第3部　ヒンドゥスターン	第1部　本史(Tārīkh-i Aṣl) 第2部　簡史(Mukhtaṣar)
内容	バーブルの回想録 地誌(フェルガーナ, サマルカンド,カーブル, ヒンドゥスターン)	モグール史概説 ハイダルの回想録 地誌(カーシュガル, モグーリスターン,チベット, カシュミール)
スタイル	叙述体;日記体	叙述体
依拠史料	著者自身の体験・見聞 『伝記の友』Ḥabīb al-Siyar などの文献	著者自身の体験・見聞 モグールの言伝え 『バーブル・ナーマ』などの文献
表現の特徴	生き生きとした描写 率直,簡潔,明晰 迎合なし	生き生きとした描写 率直,かなり簡潔,かなり明晰 ほとんど迎合なし
執筆の目的	バーブルの生きた時代の様相 と自らの体験を子孫に伝える	ハイダルの生きた時代の様相 と自らの体験を子孫に伝える モグールのハーンらの歴史の保存

2人の著者,すなわちバーブルとハイダルを比較して見ると,両者が多くの共通点を持つ事に気づく。バーブルはティムール朝の王子であり,ハイダルはモグールの最有力家系ドゥグラート家の一員である。すなわち,共に15世紀の中央アジア支配階層の最上部に位置する家系に生まれた王侯・貴族であり,誕生の地もフェルガーナ,ウラ・テペときわめて近い。バーブルは12才の時,ハイダルは8—9才の時,共に幼くして父を失い,以後相似通った苦難と辛苦の日々を体験する。彼らの波乱万丈の活動の舞台は,中央アジア,アフガニスタン,インドと驚くほどの広範囲に及び,それを反映して,両者共に見聞の広さと体験の豊富さを誇る。そして困苦の後,最後にはそれぞれ異境の地インドとカシュミールで王位につき,結局再び故郷の地を踏む事なくその地で没する。要するに,両者はきわめて相似通った生涯を過ごしたのである。

ところで,この似通った生涯を過ごした2人のうち,まずバーブルが,今日トルコ散文学史上最高の傑作といわれる回想録『バーブル・ナーマ』を書いた。そしてバーブルの傍らで実り豊かな歳月を過ごした経験を持ち,バーブルに対して最大限の敬意を抱いていたハイダル[間野 1987]は,『バーブル・ナーマ』の完成後程なくして,その1写本を入手した。この書に対するハイダルの感想は,「気取らぬ,流暢な,明晰な言葉で書かれた,理解し易い」作品であるというものであり,この著作から自著の中に幾つかの記事を引用したと彼は述べている[TR Or：121b；TR tr：173-174]。

バーブルと同様,波乱に満ちた体験を持つハイダルが,バーブルの興味豊かな書を読み,自分も自らの体験を織り込んだ『バーブル・ナーマ』と同様の書物を書いてみたいと考えるのは,しごく自然の成行きではなかったか。つまり,2人の密接な交流と,相似通った生涯は,年下のハイダルが尊敬するバーブルを範として,同種の書物の執筆を志す一つの背景として理解できるのではないか。この推定の可否は,両書の比較を通じて,以下に検証されるはずである。

II

先の表を一瞥すれば明らかなごとく,2つの史書には多くの類似点が認められる。完成年代,完成地が近いほか,内容,スタイル,依拠史料,表現の特徴,執筆の目的もきわめて類似している。

まず内容であるが,『バーブル・ナーマ』の主要部分はバーブルの回想録である。イスラーム世界に於ける歴史叙述のジャンルの中には,従来,マホメット伝,聖者伝,詩人伝など,特定の人々に関する伝記の部門は存在した。しかし,『バーブル・ナーマ』のごとき王

侯・貴族の手になる回想録ないし自伝は稀であり[Lambton ; Rosenthal ; Tauer：451-452]，そこにバーブルの独創性と『バーブル・ナーマ』の独自の価値を認める事ができる。

一方，『ターリーヒ・ラシーディー』の第2部「簡史」も，その大部分がハイダルの回想録である。あまりにも大きな類似であり，ハイダルがバーブルに範をとった事は，この事実のみでも明白と思われる。

『ターリーヒ・ラシーディー』の第2部には，カーシュガルとその周辺地域[TR：286-303 ; TR Or：213a-223b]，モグーリスターン[TR：360-367 ; TR Or：274b-277b]，チベット[TR：404-417 ; TR Or：欠 ; TR Add：292a-297b]，カシュミール[TR：424-437 ; TR Or：欠 ; TR Add：301a-307b]に関する地誌的な叙述が挿入されている。これは，『バーブル・ナーマ』に見える，フェルガーナ[BN：1b-5b ; BN tr：1-12][4]，サマルカンド[BN：44b-50b ; BN tr：74-86]，カーブル[BN：128a-144a ; BN tr：199-227]，ヒンドゥスターン[BN：270a-293b ; BN tr：480-521]の地誌的叙述を直ちに思い起こさせる。

歴史書の中に，地誌の部分を組み込む事は，ティムール朝時代の史書に一般的に見られるものであり(例えば，[RS：369-528])，特にバーブルの発明ではない。しかし，それらの地誌は，ある特定の地域の，実見に基づく描写ではなく，地理書等の文献の記述に基づく，一般的描写にしか過ぎない。これに対して，著者自身が実際に訪れ，実際にそこで活動した地域についての地誌的な叙述を歴史的叙述の間に挿入し，著者の活動の舞台についての読者の理解をより正確にしようとする試みは，まさしくバーブルの発明であり，ヴィヴィッドな歴史叙述への大きな貢献であった。この点でもハイダルは明かにバーブルの試みを踏襲していると筆者には思われる。

『ターリーヒ・ラシーディー』の第2部には，ティムール朝スルターン・フサイン治下に活躍した重要な人物たちの略伝が収録されている[TR：193-195(部分訳)][5]。これも，『バーブル・ナーマ』に収録された，ウマル・シャイフ[BN：5b-9b ; BN tr：12-19 ; BN：12b-15b ; BN tr：24-28]，スルターン・アフマド[BN：18a-23a ; BN tr：33-40]，スルターン・マフムード[BN：25b-30a ; BN tr：45-51]，バイスングル[BN：68a-69b ; BN tr：110-112]，スルターン・フサイン[BN：163b-182b ; BN tr：256-292]の各宮廷で活躍した人物らに関する略伝を直ちに思い起こさせる。もっとも，歴史叙述の間に略伝を挿入する方法は，バーブルの発明ではなく，ティムール朝時代の他の歴史書にも見られるところである[6]。ただし，バーブルの人物描写は，他書に見られる描写とは比較にならぬ

程生き生きとして的確であり，この興味溢れる描写が，ハイダルによる略伝部分の執筆に影響を与えたと見てまず間違いないであろう。

バーブルは，『バーブル・ナーマ』の中に4通の書簡[7]と1通の勅令[8]，つまり計5通の原文書を一言一句変更する事なくそのまま収録している。バーブルのこの処置は，『バーブル・ナーマ』をより信頼度の高い，より興味深い史料とするのに役立っている。ハイダルが『ターリーヒ・ラシーディー』の中に，先人の手になる史書[9]，スーフィーの手になる書簡および論文[10]の写しをそのまま収録しているのも，おそらくこのバーブルの処置を参考にしたものであろう。ハイダルのこの処置も，『ターリーヒ・ラシーディー』の史料的価値をより高めるのに役立っている。

次にスタイルであるが，『バーブル・ナーマ』が日記体の部分[BN：216b-382a]を含んでいる点が，叙述体に終始している『ターリーヒ・ラシーディー』とは異なっている。しかしこの相違点はさほど重要ではない。というのは，バーブルは本来，彼が日々書き継いでいたと思われる日記を基に，全編を叙述体に書き直して読者に提供しようと考えていたが[11]，その意図を果たし得ないまま，いわば時間切れで病没してしまったと考えられるからである。つまり，現在日記体で残されているヒジュラ暦925年以降の部分[BN：216b-382a；BN tr：367-689]も，時間さえあれば，当然，叙述体に変換されていたと考えられるのである。

両書が依拠した史料は，共に主として著者自身の直接的な体験・見聞であり，この点でも両者は共通している。ただし，ハイダルは『ターリーヒ・ラシーディー』の14-16世紀モグール史概説ともいうべき第1部「本史」の執筆のために，モグールらの間に伝えられている各種の伝承や，多くの史書，宗教文学，地理書などの文献を大幅に利用している[間野1985]。この点は，ホーンダミールの『伝記の友』等を部分的には利用したと思われるものの[Teufel：141-187；Beveridge：1906；1909；1910；BN tr：11；57；256；328-329；348；Mikulukho-Makulaj：237-249]，記述の根拠の大半を自らの体験・見聞におく『バーブル・ナーマ』とは，大きく相違している。

この相違の原因は，両書の，執筆の目的の相違の中に求めることが出来る。バーブルの『バーブル・ナーマ』執筆の目的は，バーブルが属したティムール家の歴史をたどることではなく，あくまで自らの生きた時代の諸相と自らの体験を自らの子孫のために書き残すことであったと思われる[12]。事実，バーブルは，『バーブル・ナーマ』の中で，自らの祖先達の歴史については手短かにしか触れていない[13]。彼の祖先達の歴史は，ティムールの在世中に始まって，以後もティムール朝の宮廷史家達によって既に種々の形で書き留

められていたから[Woods：81-108]，バーブルが改めてそれを執筆する必要はほとんどなかったであろう。

このように，バーブルの『バーブル・ナーマ』執筆の目的は1つであった。それに対しハイダルの『ターリーヒ・ラシーディー』執筆の目的は2つあったと思われる。その1つはバーブルの『バーブル・ナーマ』と同様，自らが生きた時代の諸相と自らの体験を子孫達に書き残すことであり，そのためにハイダルは第2部「簡史」[14]を執筆したと考えられる。しかし，バーブルと異なり，ハイダルの手元には自らの祖先達に関する歴史書，すなわちモグールの足跡をたどり得る歴史書がまったく存在しなかった[TR：2, 148, 150]。かくしてハイダルは，「世界の歴史のページから抹殺されようとしている」[TR：148-149]モグールのハーンらの物語を保存する役割を自らに課したのである。その結果，『ターリーヒ・ラシーディー』の第1部「本史」が書かれ，この部分の執筆に当たっては，先人の手になる多くの文献が参照・利用されたのである。

つまり，『ターリーヒ・ラシーディー』の第1部は『バーブル・ナーマ』の影響からはまったく独立して執筆されたものであり，そこにハイダルの独自性を認める事が出来る。しかし，第2部はあくまで『バーブル・ナーマ』を範として執筆されたものと見なければならない。その意味で，ウズベクの史家ハサノフの，『ターリーヒ・ラシーディー』は元来『ハイダル・ナーマ』と呼ばれた方がよりその内容にふさわしいという指摘[Khasanov：42]も，部分的に，つまり第2部については妥当といえるであろう。

注意すべきは，ハイダルがまず最初，第2部を執筆し，その後で第1部を書いたという時間的な前後関係である。ハイダルは第2部を先に書いた理由を明確に述べていない。しかし，おそらくハイダルにとっては，自らの体験・見聞に基づいて執筆した第2部の方が，体験・見聞の他，諸文献をも利用して書かねばならなかった第1部より，より着手し易かったということであろう。では，なぜ着手し易かったか。それは，ハイダルの手元に第2部執筆のための最良の手本『バーブル・ナーマ』があったが故と筆者は考える。そして，第2部の完成がハイダルに第1部執筆への勇気を与え[TR：151]，かくしてモグールに関する無比の史料『ターリーヒ・ラシーディー』が完成されたと考えるならば，『ターリーヒ・ラシーディー』誕生のために『バーブル・ナーマ』が果たした役割も大きかったということになろう。

両書の最大の相違点は，『バーブル・ナーマ』がチャガタイ・トルコ語を用いて執筆されているのに対し，『ターリーヒ・ラシーディー』がペルシア語で著されているという点である。ハイダルが，ペルシア語の他にチャガタイ語にも通じていた事は，彼が『ジャ

ハーン・ナーマ』と題する韻文の文学作品を残している事からも明らかである[Validi：985-989]。それにもかかわらず,ハイダルはなぜペルシア語を用いたのか。この点に関する解答は,13世紀以降のイラン,中央アジア,インドでは,ほとんど全ての歴史書がペルシア語で書かれていたという事実を思い浮かべれば,おそらく十分であろう。つまり,当時,これらの地域では,歴史はペルシア語で書かれるのが通例であり,ハイダルもこれらの通例に従ったに過ぎないという事になる。逆に,バーブルがチャガタイ語で史書を著したという事実が,当時としてはむしろ特異なものであり,バーブルのこの選択の理由の解明に関心が寄せられるべきものと思われる。

この点につき,バーブル自身は何も述べていない。しかし,バーブルの簡潔・明晰な,平明な文体に対する強い好み[15]を思い起こせば,彼が,ティムール朝の宮廷史家らによって愛用されていた複雑・難解で,あまりにも高尚なペルシア語の文体の使用を意識的に避けた事は容易に想像できる。もちろん,文体の好みばかりでなく,バーブルの同時代人で,チャガタイ語の宣揚者であったアリー・シール・ナヴァーイー[16]のバーブルに及ぼした影響も,当然考慮されるべきであろう。なぜなら,バーブルがナヴァーイーを尊敬し,この文人宰相と実際に文通した事もあるという記事が『バーブル・ナーマ』の中に見えているからである[BN：86b-87a；BN tr：136；BN：170b-171b；BN tr：271-272]。なお,ティムール朝の歴史家達の高尚なペルシア語に比較すると,ハイダルのペルシア語による文体も,かなり簡潔で,かなり明瞭である。ハイダルが使用した,率直な,ほとんど迎合の感じられぬ表現と共に,文体の面でも,ハイダルがバーブルの影響を受けたと考えてほぼ誤りないであろう。

『バーブル・ナーマ』は,やがてバーブルの孫アクバルの命で2度にわたってペルシア語に翻訳された。『ターリーヒ・ラシーディー』も東トルキスタンで,後,チャガタイ語に翻訳された[Hofman：162-168]。この事実は,この貴重な2つの史書が幅広く読まれるためには,チャガタイ語版,ペルシア語版の両者が必要であった事を意味する。そうであれば,2人の著者がもともと使用した言語の相違についての詮索も,長い眼でみれば,さほどの重要性を持ち得ないという事になるであろう。

『バーブル・ナーマ』は,それ自体きわめて重要な史書である。しかし,同時に,この書の出現が,後の歴史家達に及ぼした影響という別の側面からも,また重要な作品と見なされるべきものである。ハイダルは,まさに最初に,その最も強い影響を受けた歴史家であった。そしてハイダルの『ターリーヒ・ラシーディー』は,やがてその影響のもとに東トルキスタンでマフムード・チョラスの『歴史』のごとき貴重な作品を誕生させる。また

『バーブル・ナーマ』は，ムガル朝の宮廷でいくつかの回想録を生み出す[17]。これらの事実は，『バーブル・ナーマ』が中央アジアのみならずイスラーム世界全体の史学史上に占める位置の重要性を明瞭に告げるものであり，『バーブル・ナーマ』の価値を改めて認識させるものである。

いうまでもなく，『バーブル・ナーマ』はティムール朝期の中央アジアが生み出した一つの傑作である。この様な作品を生み出す背景となったティムール朝期中央アジアの文化状況が如何なるものであったか。その総体的把握の必要性が，いよいよ痛感されるのである。

注

1）普通『バーブル・ナーマ』と呼ばれているバーブルの回想録には，次のような幾つかの呼称がある。バーブル自身は『バーブル・ナーマ』の中で，自著について，①*Waqā'i'*（「出来事の記録」）[BN：363 a]，②*Tārīkh*（「史書」）[BN：27 a，50 b，158 a]という2つの呼び方で言及している。ハイダルが，バーブルの回想録を，「『ワカーイー *Waqā'i'*』という名のトルコ語の史書（tārīkh）」[TR：174；TR Or：121 b]と呼んでいるところから考えると，本来の呼称は『ワカーイー Waqā'i'』つまり『出来事の記録』で，「史書」は単に普通名詞として使用されているに過ぎないと考えられる。バーブルの娘グルバダン・ベギム Gul-badan Begim は，その『フマーユーン・ナーマ』*Humāyūn-nāma* の中で，父の書を③*Wāqi'a-nāma* と呼び[HN：2 b]，またはアブル・ファズル Abū al-Faḍl は，『アクバル・ナーマ』*Akbar-nāma* の中でそれを④*Wāqi'āt* と呼んでいる[AN：118]。共に原名の『ワカーイー』に基づいて付けられた呼称と考えられる。⑤『バーブル・ナーマ』*Bābur-nāma* は，イルミンスキーの活字本の底本であるケール写本と，ベヴァリッジが出版したハイダラーバード写本の表紙に見える呼称で，著作時以後に，著者以外の人によって付けられた呼称と思われる。この他，⑥*Tūzuk-i Bāburī*（『バーブルの制度』）が，後代のインドの史書に見えるが[Elliot 1872：218 sqq.]，もちろん原名ではない。今日，研究者達は，チャガタイ語の原テキストを指す場合に『バーブル・ナーマ』を，ペルシア語訳本を指す場合に『ワーキーアーテ・バーブリー』を用いることが多い。これらの呼称の問題については，トイフェル[Teufel, 1883：184-186]，ベヴァリッジ[Beveridge, 1905：742] [BN tr：xxxiii, note 1]の研究をも参照の事。なお，『バーブル・ナーマ』の記述は，ヒジュラ暦936年ムハッラム月3日，すなわち西暦1529年9月7日で中断し，それ以降の部分は，書かれていたと思われるにも関わらず，現在までのところ発見されていない[BN tr：690]。

2）『ターリーヒ・ラシーディー』の完成年代については，研究者の間に混乱がみられるので，ここに筆者の考えを記しておきたい。第1部の序文は，951/1544-45年に書かれた[TR：2]。第1部の

完成は,952年ズール・ヒッジャ月末日,すなわち1546年3月3日である[TR Or：105 a ; TR Add：92 a]。これに関連して,ロッス英訳本にみえる訳文("the end of the month Zulhijja of the year 953"[TR：149])は誤りである。しかし,第1部には,953/1546-47年になされた追加の部分が含まれている[TR：132 ; TR Or：96 b]。第2部は,948/1541-42年[TR：177,486 ; TR Or：124 a]と950/1543年[TR：424 ; TR Add：301 a]の間に書かれた。リュー[Rieu：166-167]とイライアスN. Elias[TR：8]は,第2部は948/1541-42年に書かれたといい,アフメドフ[Akhmedov：41]は,951/1544と952/1545年に書かれたというが,いずれも不正確である。

3) 例えばハイダルも,「特に,モグールのイスラーム改宗以後,彼らについての歴史は1つとして書かれていない」[TR：150]と述べる。事実,ティムール朝期からシャイバーニー朝,ムガル朝期にかけてのほとんど全ての歴史書は,イラン出身の歴史家によって書かれた。その中で,中央アジア出身の作者によって書かれた『バーブル・ナーマ』と『ターリーヒ・ラシーディー』は特異な存在であり,これに比較し得るものは,17世紀のアブル・ガーズィー・バハードゥル・ハーンの2作品(*Shajara-yi Turk* と *Shajara-yi Tarākima*)のみといっても過言ではない。

4) 以下,筆者による『バーブル・ナーマ』邦訳(BN Jtr I, BN Jtr II)の該当ページは,煩雑を避けて,ここには示さない。邦訳には,BNの葉数が各ページの欄外に明示してあるので,該当箇所は容易に検索できるはずである。

5) この部分のテキストは,Salemann：321-385, Shafi'：150-172として出版されており,新しい英訳がサックストンの史料集に見える[Thackston：357-362]。

6) 例えば,ホーンダミールの *Ḥabīb al-Siyar* には,略伝の部分が含まれる。[Thackston：107-114]を見よ。

7) バーブル毒殺の企てについて,バーブルがカーブルに出した書簡[BN：305 a -307 a ; BN tr：541-543] ; シャイフ・ザイン Shaykh Zayn が起草した捷報[BN：316 a -324 b ; BN tr：559-574] ; バーブルのフマーユーン宛書簡[BN：348 a -350 a ; BN tr：624-627] ; バーブルのホージャ・カラーン Khwāja Kalān 宛書簡[BN：359 a -361 a ; BN tr：645-648]。

8) バーブルが発布した禁酒令[BN：312 b -314 a ; BN tr：553-556]。

9) Juvaynī, *Tārīkh-i Jahān-gushā'i*[TR：288-293] ; Sharaf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Ẓafar-nāma*[TR：15-22 ; 23-37 ; 39-50 ; 430-432]。

10) ナクシュバンディー教団のホージャ・アフラール Khwāja Aḥrār が弟子のムハンマド・カーディー Muḥammad Qāḍī にあてた書簡(*khaṭṭ*)[TR Or：165 a -166 a] ; ムハンマド・カーディーの論文(*risāla*)[TR Or：255 b -260 a] ; ホージャ・ヌーラー Khwāja Nūrā の2つの論文(*risāla*)[TR Or：255 b -260 a ; 306 a -319 b] ; ホージャ・ヌーラーの書簡(*khaṭṭ*)[TR Or：322 a -326 a]。ロスは,これらの全てを翻訳から省いて,訳出しなかった。

11) デイルの,バーブルの文章が明快で簡潔なのは,その基になった日記の文体に由来するのではな

いかとする示唆は興味深い[Dale：50]。

12）サブトゥルニーは,『バーブル・ナーマ』は,バーブルがその政治的主張の正当性を裏付けるために著した,いわば政治的な書物であり,近代的な意味での自伝と見なすべきではないと述べている[Subtelny：116-117]。これに対してデイルは,『バーブル・ナーマ』の自伝的・人間主義的特徴を詳述している[Dale]。バーブル自身,『バーブル・ナーマ』執筆の目的について明確な記述を残していないため,バーブルの意図を正確に把握することは必ずしも容易でない。しかし,この書についての,アブル・ファズルによる「全ての地上の君主のための手引であり,全ての経験豊かで学識深い人々が正しい考えや適切な思考を教えるための規範である」(*dastūr al-'Amalīst bi-jihat-i farmān-ravāyān-i 'ālam va qānūnīst dar āmūkhtan-i andīshhā-yi durust va fikrhā-yi ṣaḥīḥ barāy-i tajribat-padhīrān va dānish-āmūzān-i rūzgār*)[AN：117]という定義は,バーブルの執筆の意図をよく反映しているように思われる。『バーブル・ナーマ』の中にバーブルの政治的主張が含まれている事は,サブトゥルニーの述べる通りであるが,その点を余りに強調するのには賛同できない。全体としては,やはり回想録,自伝と見るのが正しいであろう。なお,サブトゥルニーが言及した「正当性」の問題については,マンツの研究も参考になる[Manz：105-122]。

13）サブトゥルニーは,バーブルが自己のサマルカンドの領有権に関する主張を裏付けるために,彼以前にその地を統治したティムール家の人々を長々と列挙したと述べる[Subtelny：116-117]。しかしこの部分と,バーブルのヒンドゥスターンの統治者に関する記述[BN：270 b-272 a；BN tr：481-484]とを比較すると,ティムール家の君主達に関する記述は,むしろ短いように,筆者には思われる。

14）第2部「簡史」の枚数は,第1部「本史」の2倍以上あり,「簡史」という呼称は必ずしも適切ではない。

15）バーブルの簡潔な文体の例として,例えば,自分が恋し結婚した女性との思い出を,「私がホラーサーンへ行った時,会い,恋し,求婚し,カーブルへ連れて来て,結婚した」(men Khorāsāngha barghanda körüp khoshlap tiläp Kābulgha keltürüp aldı)[BN：20 a]のごとく,converb を連ねた,これ以上は短くし得ない文章をあげる事が出来る。また,平明な文章についてのバーブルの好みは,息子フマーユーンから受け取った書簡に対して,彼が出した返信に見える「お前の手紙は,苦労して読めば,読めることは読めます。しかし文章が非常に不明瞭です。〈謎謎〉の散文など,誰も見た事がありません。…お前は文章に凝りたいといっていますが,そのために文意が不明瞭になっているのです。今後は凝ろうなどとせずに,分かりやすい,明快な言葉を使って書きなさい。そうすれば,お前の苦労も少なくてすむし,読む者の苦労も減るはずです」[BN：349 b]というような記述の中に反映されている。

16）アリー・シール・ナヴァーイーは,『2言語についての判決』*Muḥākamat al-Lughatayn* を著し,ペルシア語に対するチャガタイ語の優越を主張した。なお,このナヴァーイーがいかなる出自の

者であるかについては,最近の2つの論文で,対立する見解が述べられている[Subtelny 1980：797-807；久保一之：22-24]。サブトゥルニーがナヴァーイー家のウイグル・バフシ(書記)出身説を唱えるのに対し,久保はむしろそのトルコ系軍人の家系出身としての側面に注目すべきであると説く。

17) 例えば,バーブルの曾孫ジャハーンギールは,『バーブル・ナーマ』に範をとって,*Tūzuk-i Jahāngīrī* を著した[Dale：50]。

〈史料略語〉

AN：*The Akbarnámah by Abul Fazl i Mubárak 'Allámí*, I, ed. Maulawí 'Abd-ur-Rahím (Culcutta, 1877).

BN：*The Bābur-nāma (Fac-simile)*, ed. Annette S. Beveridge (Leiden, 1905 ; repr., London, 1971).

BN tr：*The Bābur-nāma in English (Memoirs of Bābur)*, tr. Annette S. Beveridge (London, 1922 ; repr. London, 1969).

BN Jtr I：間野英二,『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅰ)「フェルガーナ章」日本語訳,『京都大学文学部研究紀要』22(1983).

BN Jtr II：間野英二,『バーブル・ナーマ』の研究(Ⅱ)「カーブル章」日本語訳,『京都大学文学部研究紀要』23(1984).

HN：*Humāyūn-nāma*, ed. Annette S. Beveridge (London, 1902 ; repr. New Delhi, 1983).

RS：Mīrkhwānd, *Rawḍat al-Ṣafā*, jild 7 (Tehran, 1339).

TR tr：*A History of the Moghuls of Central Asia, being The Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlát*, ed. N. Elias, tr. E. Denison Ross (London, 1895, re-issue, 1898 ; repr. New York, 1970).

TR Or：*Tārīkh-i Rashīdī*, MS British Library, Or. 157.

TR Add：*Tārīkh-i Rashīdī*, MS British Library, Add. 24090.

〈参考文献〉

Akhmedov, B.A.

1985 *Istoriko-geograficheskaja literatura Srednej Azii XVI-XVII vv. (Pis'mennye pamjatniki)*, Tashkent.

Beveridge, A.S.

1905 The Haydarābād Codex of the Bābar-nāma or Wāqi'āt-i-bābarī of Ẓahīru-d-dīn

Muhammad Bābar, Barlās Turk. *JRAS*, 1905.

Beveridge, H.

1906 The Emperor Babar in the Habibu-s-siyar, *The Imperial and Asiatic Quarterly Review and Oriental and Colonial Record*, Ser. 3, vol. 21.

1909 The Emperor Babar and the Historian Khwānd Amīr, *ibid.*, vol. 28.

1910 do., No. II, *ibid.*, vol. 29.

Dale, S.F.

1990 Steppe Humanism : The Autobiographical Writings of Zahir Al-Din Muhammad Babur, 1483-1530, *International Journal of Middle East Studies*, 22.

Elliot, H.M.

1872 *The History of India, as told by Its Historians*, IV, London.

Hofman, H.F.

1969 *Turkish Literature. A Bio-bibliographical Survey*, Section III, Part I : Authors, Vol. 3, Utrecht.

Khasanov, Kh.

1964 *Khofiz Abru, Khaidar Mirza, Philipp Efremov*, Tashkent.

久保一之

1990 ミール・アリー・シールの学芸保護について,『西南アジア研究』32.

Lambton, A.K.

1962 Persian Biographical Literature, *Historians of the Middle East*, ed. B.Lewis and P. Holt, London.

間野英二

1985 『ターリーヒ・ラシーディー』の史料について,『三笠宮殿下古稀記念オリエント学論集』.

1987 バーブル・バーディシャーフとハイダル・ミールザー——その相互関係——,『東洋史研究』46-3.

Manz, B.F.

1988 Tamerlane and Symbolism of Sovereignty, *Iranian Studies*, XXI-1·2.

Miklukho-Maklaj, N.D.

1963 Khondamir i "Zapiski" Babura, *Tjurkologicheskie Issledovanija*(1963).

Rieu, Ch.

1879 *Catalogue of the Persian Manuscripts in the British Museum*, I, London.

Rosenthal, F.

1937 Die arabische Autobiographie, *Studia Arabica*, I, ed. F. Rosenthal, G. Grünebaum and

W. J. Fischel, *Analecta Orientalia*, 14.

Salemann, C.

1887 Neue Erwerbungen des Asiatischen Museums, *Mêlanges asiatiques tirés du Bulletin* de l'*Académie impériale des Sciences de St.-Pétersbourg*, IX-3.

Shafi', M.

1934 Iqtibās az Tārīkh-i Rashīdī, *Oriental College Magazine*, X-3.

Subtelny, M.E.

1980 'Alī Shīr Navā'ī : *Bakhshī* and *Beg*, *Harvard Ukrainian Studies*, III/IV, Part 2.

1989 Bābur's Rival Relations : A Study of Kinship and Conflict in 15th-16th Century Central Asia, *Der Islam*, 66.

Tauer, F.

1968 Persian Learned Literature from Its Beginnings up to the End of the 18th Century, *History of Iranian Literature*, ed K. Jahn, Dordrecht-Holland.

Teufel, F.

1883 Bâbur und Abû' l-fażl, *ZDMG*, 37.

Thackston, W.M.

1989 *A Century of Princes. Sources on Timurid History and Art*, Cambridge, Massachusetts.

Validi, Ahmet-Zeki

1937 Ein türkisches Werk von Ḥaydar-Mirza Dughlat, *BSOS*, VIII-4.

Woods, J.

1989 The Rise of Timurid Historiography, *JNES*, 46-2.